

トピックス 早朝太極拳の会で研修と懇親会を行う

地元清新町の老人会組織である、清新くすのきプロバンス会の「早朝太極拳の会」は、3月19日(土)に27年度の研修会兼懇親昼食会を清新町コミュニティ会館で開催しました。24名が参加して、まずは資料による呼吸の機能と呼吸法についての講習、そのあと、壁面の大きな鏡を使つての正しい歩形と運足を練習。ついで、腹式呼吸法の練習などを行いました。

終了後は部屋を替えて昼食懇親会を行い、その中で、48回開催した本年度の、皆勤者・牧勉さん、精勤者・高瀬みよ子さん、西村祐子さんの3人を表彰いたしました。

なお、この会も本年度の初めには23名だった登録者が3月には28名までに増加しました。

東大島鶴の会お花見と年度末表彰

「東大島鶴の会」は年度末の練習日3月25日に、計51回開催した27年度の皆勤・精勤者を以下のとおり表彰しました。その他の人たちもふくめて出席率の良いのがこの会の特徴です。この日は練習は半分にして、近くの大島小松川公園で、ちょっと早い花見ならぬ“つぼみ”の宴会で大いに盛り上がりました。会には3月にも新規の入会者が相次ぎ、ついに40名を超える会員数となりました。

皆勤賞； 網代節子さん、湯瀬三枝子さん、鶴本清恵さん

精勤賞； 福木弘子さん、高野幸枝さん、岩瀬悦子さん、森田璃絵子さん、松井清貴さん、州崎理恵子さん、

江東区教室交流会（橋口先生研修会）に参加

3月26日(土)9時半から豊洲文化センター・レクホールで、第2回江東区教室交流会が開催されました。今回は橋口澄子師範・東京都支部顧問【写真】をお迎えしての「特別研修会」とあって区外の教室からの参加もあり、都合17教室から124名が参加しての盛大な催しとなりました。企画された鶴岡睦子師範・東京都支部理事の司会で、各教室の紹介などの後、橋口先生の実技を交えながらのご講話があり、また個別なご指導もあって、充実した交流会となりました。



担当教室の亀戸SC教室と東大島鶴の会から有志が参加しました。

第17回太極拳祭に参加

同じ3月26日には台東リバーサイド体育館で第17回太極拳祭が485名の参加で盛大に開催されました。今回は瑞江鶴の会を中心に有志が参加して、終日みなさんと楽しく交流しました。小生は早朝野外太極拳に始まり、午前中は豊洲へ、午後は浅草へと3連投でいささかばてました。【写真は会場一杯の百花拳】



5月3日、北地域野外太極拳に参加しましょう！

5月3日に恒例の「北地域野外太極拳」が開催されますので、ふるってご参加ください。

場所； 台東リバーサイドスポーツセンター陸上競技場

時間； 午後1時30分から4時まで

参加費； 無料

「支那」という言葉が古代の初の統一王朝であった『秦』に由来することはよく知られています。その『秦』という名前が世界各地へ喧伝され、チャイナとかチーノとかシノとか呼ばれたのが初めです。古代インドでも、同様に発音されていたようで、のちに、仏教が中国に伝来する過程で、逆に「支那」「脂那」「震旦」「振旦」などと音訳されて、逆輸入された言葉のようです。

ちなみに空海の漢詩文集「性靈集」にも“支那の五台山は文殊菩薩の家…”と明記されていますし、そののちも主として仏教関係の図書には用例がいくつも残されていますから、これが中国でも使われていた言葉であることは明白です。また、江戸中期に日本に潜入して捕らえられたイタリア人宣教師シドッチに対して新井白石が行った尋問の記録『西洋紀聞』でも、「チーノ」を「支那」と翻訳しています。

清朝末期から多くの中国人が日本に来て勉強や革命運動を行うようになりましたが、孫文、宋教仁などの革命家をはじめ、日本側の支援者も含めて、「支那」という言葉を素直に用いていました。というのも、もともと中国には清とか明とか王朝を表す言葉しかなかった、つまり国家という意識、それを表す言葉としてはこの「支那」しか当時は無かったからです。

しかし、辛亥革命が成功して中華民国が成立した後は、一転してこの「支那」という言葉についての中国人側の忌避意識が広がってゆきます。確かに、漢語としての「支那」は“支”の持つ意味からも、“中華民国”という誇らしい名前とは対極にある言葉です。チャイナやチーノには拒絶感は無くとも、漢字で「支那」と書かれるのは…、ということでしょうか。

終戦後、国民党政府（蒋介石）から日本政府に対して「支那」という言葉を用いないよう正式に要請があり、日本政府もこれを了として、国内にも周知しています。ですから、現在では「中国」とか「中華」という言葉がこれに替わっているわけです。

一部の政治家や論客の方々が、今でもことさらに、「支那」という言葉を用いていますが、やはり相手が嫌がる言葉を故意に、執拗に、感情的に、使うのは好ましくないことだと思います。同じ漢字を共用する国同士ですから、よりセンシティブに、よりユーモラス（人間的）に対応対処したいものです。

さこうべん
左顧右眄（再開） 【第17話 漢詩に学ぶ・漢詩を楽しむ】

第20回 ホーチミン 胡志明の『獄中日記』を詠む～その1

長らく連載してきました、この「漢詩に学ぶ・漢詩を楽しむ」シリーズの最後として、ちょっと異色の詩人の漢詩をご紹介します。それはベトナム建国の父と呼ばれる胡志明（ホーチミン）の創った漢詩、具体的には『獄中日記』と呼ばれる漢詩集のことです。

ご承知かと思いますが、胡志明（ホーチミン）の略歴と、ベトナム人民共和国建国に至る近代、現代史の要点を、ごく簡単にご紹介します。

胡志明（ホーチミン）は1890年にフランス統治下のベトナムに生まれ、父から論語など漢籍を教えられ、またフランス語も学びますが、民族意識に目覚めて、外国航路のコックとなって出国、フランスを始め、北アフリカ、中南米、米国、英国などを回り、あるいは滞在して、語学に磨きをかけ、また世界情勢を勉強します。1917年のロシア革命に刺激を受けて、ベトナム独立運動に立ち上がります。1945年第2次世界大戦終了後も統治を続けるフランスと闘って独立を勝ち取りますが、今度は替わって南部を支配する米国との間で、1965年にベトナム戦争がはじまります。1975年サイゴン陥落によって、ベトナム全土がベトナム人民共和国によって統一されました。ホーチミン自身は惜しくも1969年に心臓発作で急死してしまいましたが、ベトナム独立のために一生をささげ、生涯独身と清貧を貫き、権威主義を嫌った、彼の人となりは今もベトナム人民から慕われ、あがめられています。

この『獄中日記』はたまたま、私がベトナムで働いていた1998、9年ごろ現地で手に入れて非常に感

銘を受けましたので、その一部を翻訳して、当時日本向けに発信していた『ベトナムあらかると』に掲載したのですが、今回はそれをそっくりここで転載させていただきます。

以下『ベトナムあらかると』より。

ホーチミン市（旧サイゴン市）を訪れた観光客が、必ずと言っていいほど訪れるのが「戦争犯罪博物館」である。ベトナム戦争におけるアメリカ軍の残虐行為を告発する生々しい展示物に胸を突かれる思いがするが、中でも、その一画に当時のままに再現されているコンダオ島の監獄“虎の檻”には驚かされる。ここは、フランス統治時代以来、思想犯や、独立運動、反政府リーダーたちが収容されて拷問、虐待を受け、また殺されたところである。当時そのままにいくつかの獄屋が再現されており、薄暗い獄内を鉄格子越しにのぞき込むと、やせ衰えた収容者（の人影）がじっとうずくまっているので思わずぎょっとなってしまふ。壁に彼が当時書き残したと思しき落書きがそのままに再現されている。漢詩である。

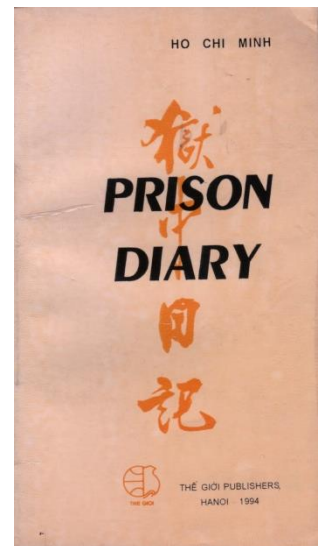
身體在獄中	身体ハ獄中ニアレド
精神在獄外	精神ハ獄外ニアリ
欲成大事業	大事ヲ成サントセバ
精神更要大	精神ハサラニ大ナルヲ要ス

どのような状況下で書いたのか、そして彼はどうなったのか。それを想うと不覚にも涙が溢れてくるのを禁じえなかった。

しばらくのち、同じく市内にある「ホーチミン記念館」、俗にいう、“ホー叔父さんの記念館”を訪ねるとき、同じ詩に巡り合い、初めてそれが建国の父ホーチミンその人の詩作であることを知った。

彼は1942年7月、政治工作の目的で中国に潜入するが、間もなく蒋介石軍に捕らえられてしまう。それから30か所もの監獄を転々と移送され、都合1年2ヶ月もの「虜囚の旅」と「獄中生活」を余儀なくされるのである。このとき聊を慰めるため、あるいは記録に残すために、詩作を始めたという。のちに、『獄中日記』と題して出版され、ベトナム国民にひろく読まれてきたこの詩集の巻頭を飾るのが上記の詩なのである。

彼自身はもちろん漢字で漢詩として作っているのであるが、のちに、専門家によってベトナム語と英語にも翻訳された。現在出版されている“獄中日記”は漢・越・英の三カ国語対訳詩集となっている珍しいものである。 【写真上；同書表紙】



ところで、彼がホーチミン（胡志明）と名乗ったのはこのときが初めてで、もちろん中国に潜入するために付けた偽名なのだが、それ以前は、彼がフランスで政治活動を始めた1919年に名乗った（これも偽名のNGUYEN AI QUOC（阮愛国）という名前でも知られていた）のである。ちなみに本名はNGUYEN TAT THANH（阮必成）という。

肉体的にも、精神的にも、たいへんな状況におかれながら、常に豊かな感受性で、ヒューマンな視点を忘れず、囚われの日々を闘いそして詠い上げてゆく姿にまず感動した。次の詩がまさに詩作第一首である。（以下の日本訳はすべて小生です。）

開卷	開卷
老夫原不愛吟詩	老夫モトヨリ詩作ヲ知ラザレドモ
因為囚中無所為	囚ワレノ身ニ成ススベモナク
聊借吟詩消永日	詩作シテ慰メル無聊ノ日々

且吟且待自由時　　タダ吟ジタダ待ツ自由ノ時

もともと、語学が達者で、留学して覚えたフランス語は当然として、英語、ロシア語、北京語、広東語等にも長けていたと言うが、初めてという漢詩も堂々たるものである。もっともこの年代のベトナムの知識人としては当然の素養だったとも考えられる。

望月

望月

獄中無酒亦無花

獄中ニ酒ナクマタ花モナケレド

對此良宵奈若何

コノ良キ宵ヲ如何ニセント

人向窗前看名月

窓辺ニ立チテ名月ニ向カエバ

月從窗隙看詩家

月マタ窓隙ヨリ詩家ヲ見ル

(次号に続く)

アーカイブス「雲の手通信」 (再掲・昔のコラム)

健康妄語録 禅と太極拳 (2006年12月第30号)

あるテレビ番組で、山田無文老師(1900～1989)の詠まれた歌を聴いて大変感動しました。立派な禅僧であったということぐらいしか知らなかったのですが、少し調べて見ました。(こういうときにインターネットは大変便利な道具です。)

老師は愛知県で生まれ、上京して仏教を学ぶため東洋大学インド哲学科に入学して、仏教学者の河口慧海師に師事しましたが、結核に罹りすぐ故郷に戻りました。ところが同じ病に罹った兄が亡くなってしまい、病気に苦しみ孤独に悩む日々を送るようになりました。そのようなある日庭の隅の南天に吹く風のそよぎに“自分は孤独ではない。大自然、大宇宙の中で万物に支えられて生きているのだ。”と忽然と悟り、その悟りの境地を託したのがこの歌です。

大いなるものにいだかれあることを けさふく風のすずしさに知る

生きる勇気を取り戻した老師は、江戸時代の名僧白隠禅師の「内観法」(丹田呼吸法)などを実践することで奇跡的に健康を取り戻し、それからは禅の普及に貢献して昭和の名僧と呼ばれ88歳の天寿を全うされました。

老師のことを調べてびっくりしたことがいくつかあります。

第一には、河口慧海師に弟子入りしていたということです。同師は、仏教を極めるためにあの明治時代に単身チベットへ潜入したことで有名です。同師のチベット旅行記(1～5)、第2回チベット旅行記(いずれも講談社学術文庫)は、あらゆる困難を強い意志と信仰心によって克服してチベットに潜入し、滞在し、脱出するまでの克明な記録ですが、私の昔からの愛読書のひとつです。2001年に念願のチベットを旅して、同師が滞在していたラサのセラ寺の僧寮を訪れ、また同師がラサへの途上に通った標高4800メートルのカンパラ峠に立った時の感激は今でも忘れ得ないものです。

第二には、山田無文老師の一番弟子があつた河野太通老師(神戸・祥福僧堂師家)であられたということです。河野太通老師は楊名時先生の太極拳の弟子でもあり、またよきご友人でもあられた方で、楊名時先生のお別れ会でも弔辞を読まれておられます。楊名時先生のご著書「太極 この道を行く」には、当時、河野太通老師は“動中の禅”を求めて太極拳に(つまり楊名時先生に)出会ったこと、また逆に楊名時先生もかねてから座禅には太極拳に通じるものがあると考えておられたので、この出会いとその後の長いご交友は大変意義深いものである、ということが書かれています。

人と人の出会いとつながりの玄妙さに改めて思い至りました。